

終末期患者の食べることへの思い・意味付けと看護援助の探求

キーワード： 終末期 食事 経口 経管

○高野 浩司 長岡赤十字病院
金子 史代 新潟青陵大学

I 目的

看護学科 3 年生の臨地実習での終末期の癌患者の食事援助経験を通し、終末期患者の食事に対する特別なこだわりや意味を感じていた。現在の文献の傾向では、終末期患者にとっての食べることの意味づけが重要視されているのに対し、終末期患者の食べることへの思い、取り組み、看護師の関わりについて明らかにされている文献が少ない。そこで、食事の援助は看護師だけでなく、医師、栄養管理士など様々な医療従事者が関わるため、看護学・医学・栄養学領域の終末期患者の食事に対する文献を解析することにより、終末期患者の食事への特別なこだわりや意味の特徴を把握することと、それらに対して看護師を中心とした各医療従事者のより良い看護援助を各領域の文献から多角的に探究することを本研究の目的とした。

II 方法

本研究は文献研究であり、対象となる論文は、2003 年から 2012 年の 10 年間に発表されている看護学・医学・栄養学領域の原著論文・実践研究・解説とした。

文献の収集方法は医中誌 web からコンピューター検索を行い、「終末期」「食事」「経口」「経管」のキーワードの組み合わせを含む文献を収集した。その中で該当した文献から原著論文を抜き出し、それぞれの原著論文のキーワードを年代別にみてそれぞれの論文の研究課題の傾向を調べた。更に疾患別、治療の場、栄養方法の違いに着目し、分類した文献の中で〔キーワード〕〔研究方法〕〔患者の食事への思い〕〔患者の食事への意味づけ〕〔看護師の関わり〕という 5 つの視点から調査・考察を行った。倫理的配慮として文献の引用には、著作権に配慮し出典を明記し、著者の意図するところを正確にとらえるように努めた。

III 結果

対象文献は 117 編であり、キーワードは原著論文 36 編から抽出した。近年では終末期患者の食べることと精神面の関係に注目した文献やチーム医療として終末期の食事のケアに取り組む文献が増えたことが伺えた。また、キーワードの結果を基に 1. 疾病別、2. 在宅と病院 3. 経口栄養と経管栄養について、終末期患者の食への思いと看護援助の違いを探った。疾病別では癌（特に消化器癌）と認知症終末期に注目した文献が多かった。癌疾患では食べるという生理機能を阻害された消化器癌研究で患者は食を身体の栄養補充と共に、精神面での生きる希望や家族との団欒と場と考えていることが特徴であった。在宅と病院では終末期医療の中でも特に生きがいなどの面に注目した

文献があった。患者の食への特別な思いを引き出す為に、医療職者が連携し、また役割を分担した治療や生活へのサポートを考察した文献が多かった。経口栄養と経管栄養では、経口から食事を摂取することで生活の質を高めることに繋がるということ、経管栄養を行ってでも患者に生きてもらいたいという家族の強い気持ちとともに、より安全で安楽なケアをするためのジレンマが生じていると主張している文献があった。

IV 考察

疾病別の文献では患者は食事を治療の為の栄養補給ではなく、精神面での生きる希望とするために経口摂取を希望している場合が多く文献で見られた。終末期では身体的苦痛が強いため医療者は“安全”“安楽”な食事ケアのために経口援助にするべきか経管援助にするべきか、ジレンマに悩むという問題が表出された。この場合、「患者がなぜ（経口で）食べたいと考えているのか」を話し合う事を通して患者・家族の希望を知ることが必要となってくると考える。

在宅と病院の文献では、基本的に食事という行為は終末期においても日常の中の楽しみ・気持ちが楽になる患者の生きがいとして意味づけられていた。看護師は患者の心身の苦痛を取り除くことに加え、食べることの意味を知り、その意味を終末期の患者が得られるように意図的に関わる必要があると思われる。

経口栄養と経管栄養の文献では、口から食べることで障害されると生存する為の栄養摂取ができなくなるばかりか、食生活の楽しみや人とのふれあいを失い、生きる喜びまで失うことになる。そのため可能な限り経口摂取への努力をはかることが必要であるといった文献が見られた。医療者が安易に効率性を優先したり、誤嚥を恐れて安易に経管栄養を行うようなことは患者にとっての生きる意義を奪いかねないということではないだろうか。生理的には口から食べるのが人間の通常栄養摂取の状態であるため、それらが行えるように援助していくことが看護師の役割として必要であると考えられる。

V 結論

終末期にある患者は食べることに對して身体的苦痛により食事が摂取できない、食事ができないことにより食の楽しみや人とのふれあいを感じられない、家族の為に食べないといけなさと感じるなど全人的な苦痛を経験していた。看護師の役割は、単に効率性を求めるのではなく、全人的な苦痛を理解し緩和に努めて、食への関心を深められるように関わることであった。